



校長室だより 35号

中島 悟

【キャッチフレーズ】

未来に残そう 伝え築いた 振徳商業
 目指せ 三種目 日本一 !

【今週の行事】 12月17日(金) マラソン大会・うどん給食

- 1 「私の振徳商」 4回卒 門内 京子 10周年記念誌より抜粋
- 2 「明日に向かって」 5回卒 長倉 那知 10周年記念誌より抜粋
- 3 出逢ったいい話 『Qちゃんは言った!』 『致知』2010年9月号より抜粋

「私の振徳商」(一部修正) 4回卒 門内 京子

潮の音遠き 朝ぼらけ
 光かがよう 南方の

つい最近、中学の校歌はと問われ、私の口からふとでた歌は、振徳商校歌でした。振徳商業高校から巣立ち、早3年の月日が経ちました。時々、こんな事に出逢う今頃です。みんなでグラウンドの草取りをし、球技大会などに汗を流していた毎日が、今でも懐かしく思えます。田舎に帰省する度、家路を急ぐ車中から、校舎の並びを見「ああ、やっぱり振徳商はいいなあ！」とその時故郷に帰ったという実感を味わえます。町並みは、だんだん発展していく中で校舎は古びていくかもしれないが、私達卒業生にとってはそれがまた喜びと言えます。

在学中、土持校長より”春の来ない冬はない。朝の来ない夜はない”と朝礼でよく聞かされました。今になってこの春がたんなる季語ではなく、いつでも苦しい。悲しい時ばかりじゃない。いつかいい事があるだろうと、そんな意味に自分で解釈するようになりました。果たしてそんな意味で言われたかは私にはわかりませんが、今私の心の中では、先生の言葉は大切に育てています。これから先、入学される方、また在学中の生徒のみなさんにも何かを与えてくれる学校でしょう。

卒業生1,239名は振徳から生まれた兄妹です。これからも一人一人が手をつなぎ輪を広め、学生時代、試験に励み、ボールと戦った青春の一ページをみんなで大切に育てて行きたいものです

「明日に向かって」(原文) 5回卒 長倉 那知

学生という言葉に、さよならをして、いくらかの年月を経て今、学生時代を振り返ってみると、思い出として、たくさんの出来事があったような気持ちでもあるし、何もこれとってなかったような矛盾した気持ちになってくるのです。考えると学生時代には、早く社会人となって一人立ちしたいと思っていたし、社会人となった今は、学生時代に戻りたいなどと勝手な事を思っている。

決して戻れない学生時代をなつかしく思い、楽しく笑った思い出や、泣いた思い出を一つ一つ取りあげてみると、やっぱり楽しかった時の事が、泣いた思い出よりも数倍に多いような頭の中に残っているようです。学生の本業である勉学を忘れがちになる程思い思いの思考をこらして頑張った文化祭や、体育祭、新しい友達を作り、いつの間にか一生涯の友達ちになろうとしている。出会いも又、良き思い出の一つではないだろうか。

卒業式、顔を真赤にして卒業したくないと泣きながら、先生と握手して「明日からはもう、社会人として頑張るように」と言われ心細さの中にも、新しい生活へ心を踊らせた日、繰り返す事はできないけれど、私の心と頭に残っている思い出は、繰り返す事ができるから大切にしまっておきたい。

出逢ったいい話 『Qちゃんは言った!』

小出義雄氏（女子マラソン指導者）より

「お願いします。私を強くしてください。

お給料は要りません。

ごはんが食べられればいいんです」

シドニー五輪で金メダルを取った高橋尚子選手が 初めて小出義雄監督率いる積水化学の門を叩いた日のことを監督はこのように述懐しています。

「Qちゃん（高橋選手のこと）を入れるのはためらったんですよ。実績もないし、大学を出ていて年を取っていたから」それでも、入社を許したのは「走りたい。そのためならお給料もいらない」という健気さに心動かされたからだったといいます。

もう一人、小出監督が育てたオリンピックメダリストがいます。バルセロナ五輪で銀、アトランタ五輪で銅を取った有森裕子選手です。生まれつきの股関節脱臼、さらに、幼少期の交通事故の後遺症でうまく走れない。しかし、何度も電話をかけて入門を請う熱意に負け、小出監督は「次期マネージャー候補」として入社させました。入社後、案の定、毎日チームの一番最後をトコトコと走っていた有森選手でしたが、ある日、小出監督に願い出ます。「監督、私をオリンピックに連れて行ってください。そのためだったらどんな練習にも耐えます。ほかの人が1時間練習するのなら、私は2時間ががんばれます」小出監督は、いまご自分の監督人生で得た実感をこのように振り返ります。「勧誘した子は強くならなかった。一銭もかけなかったのが強くなっている（笑）。要するに、志の差ですよ」

人間に能力の差というものは確かに存在するのかもしれませんが。しかし、能力の差だけで勝負が決まってしまうほど人生はつまらないものではないということ、有森選手や高橋選手のエピソードは教えてくれています。

能力の差を越えるのは志——。

大志を抱いて、それに向かって着実に

歩みを進めていく日々を送っていききたいものです。